

視点2

「居心地のいい場所」でありたい

中村共芳
(幼稚園教諭)

この場所にはいつまでもいられる、そんな居心地のいい場所と、できるならすぐに立ち去りたくなるような場所があると思います。「居心地がいい」と「居心地が悪い」。何がこの違いを生むのでしょうか。居「場所」といいますが、その場所の居心地を決める大きな要因の一つには、場所にかかわる「人」の存在があるのではないかと考えます。そして、幼稚園教諭として子どもと接している私は、子どもにとって、その「人」であるのだと思います。

私は、二年前までは小学校の教員をしてお

り、その後、幼稚園に異動になりました。小学校との違いについての戸惑いなどはあまり感じませんでした。しばらくして、小学校で子どもと接していた時と比べて、子どもとの物理的距離が近いことに気付きました。

子どもは、「幼稚園」という場所の中に、「保育者」という場所はまた別にあるように感じます。前に、なぜ物理的距離と述べたかという点、私のひざにはよく、子どもが座りに来るのです。そして、座りに来る子どもは、うれしかったことや楽しかったことを伝えたいとやって来ることもあります。少し元気が

中村共芳（なかむらともか）
鹿児島大学教育学部附属幼稚園教諭。子どもの豊かな感性、柔らかな発想に出会えることが楽しみです。

ない子どもが座ってくることも少なくありません。

朝、何という大きな理由はないものの、何となく母親と離れ難いA子がいます。しばらく母親のそばにいた後、何とか「行ってきます」と言って母親と離れたものの、なかなか朝の支度に取りかかれずにいました。私はA子の気持ちが落ち着くのを待とうと思ひ、そばに腰を下ろしました。するとA子は、私のひざの上に座ってきました。私は、そのままA子を受け入れながら、他の子どももの登園を迎えていました。他の子どもたちと朝のあいさつなどをしたり、言葉を交わしたりしていたので、A子に何か言葉を掛けるというよりは、手でA子を抱えながら寄り添っていました。A子は座りながら、他の子どもが保育室で折り紙を折っていたり、積み木で遊んだりしている姿をじっと見ていました。一通り保育室を見渡したころ、A子の表情が落ち着い

てきたので、そろそろ声を掛けようと思っていると、「上靴履いてくる」と言つてA子は立ち上がり、靴を履き替え、そのまま朝の支度を済ませ、好きな遊びを始めていきました。

またある時は、友達といざこざがあり、落ち込んでいたB子が、私のひざへやって来ました。いざこざ自体は、どちらが悪いというものではなく、B子自身もそれをわかっているようでした。だからこそ、友達だけを責めることもできずに、しかし気持ちを落ち着けることが難しいような様子でした。私はB子をひざに乗せ、「嫌だったの？」と尋ねました。するとB子は「うん」とうなずきました。私は「そっかあ」とB子の言葉を受けとめ、しかし、それ以上は語りかけませんでした。B子の表情を見ると、B子は私に、自分の悪かったところを指摘されたいわけでも、友達が悪かったのねと言つてほしいわけでもないと思つたのです。B子は私のひざの上で黙

って座っていました。私も、多く話しかけるわけでもなく、他愛ない話をしたり、周りの子どもと話したりしていました。しばらくすると、「行ってくる」と言って立ち上がったB子。「そう、行つてらっしゃい」と送り出すと、B子は、私を振り返ることなく遊びへと駆けだしていったのです。

私のひざが居心地がいいのかはわかりませんが、ただ保育者として、子どもがいつもより少し調子が出ない時や、ある出来事で気持ちが悪くなり落ち込んでしまった時に、気持ちを落ち着け、調子を取り戻す場所でありたい、子どもが居心地がいいと感じられる場所でありたい、そう思います。と同時に、「ここなら大丈夫」と、その子が感じられる居場所を園の中でたくさん見つけられるようにしていきたいとも思います。

子どもの周りにいる「人」。保育者のほかにはたくさんさんの「友達」がいます。友達がそ

の子にとつての居場所となった時、幼稚園での生活はさらに広がっていくと感じる出来事がありました。

四月。新入園児のC男は、極度の人見知りのため、園生活に慣れることができたかどうか保護者が非常に心配していました。無口なC男でしたが、進んで登園しているということを保護者から聞き、私は少し安心しました。C男が幼稚園に慣れ、自分を出していけるようにしたいと思いつながら、C男との生活が始まりました。

C男はまず、園の中をいろいろと見て回り、飼育舎に興味を持ちました。そして、C男の幼稚園での一日は、毎朝ウサギに餌をあげることから始まるようになりました。園庭に生えているシロツメクサを採ってはウサギにあげ、採ってはウサギにあげ、ということを繰り返していました。さらに、ウサギに餌をあげ終えると、次は畑の野菜に水を掛けるため

に、水道と畑を何度も往復していました。このころは、保育者にもまだ心を開いていない様子でしたので、私は朝の日課を一緒にしたり、日課をしているところに声を掛けたりするなどして、少しずつC男との距離を縮めていきました。

しばらくすると、C男が私にシロツメクサを何度も何度も採ってきてくれるようになりました。初めて持ってきてくれた時はとてもうれしくなり、この時私は、C男の居場所の一つになれたような気がしました。それから、自分の好きなアニメの話や家での話をよくしてくれるようになり、表情から、初めころよりは緊張が和らいできたように感じています。

C男の生活に変化が訪れたのは七月。同じアニメが好きなD男がいたので、互いの存在や、同じものが好きだということを伝えて、C男・D男交えて話をするような機会を増や

してみました。そうして、友達存在を知ったC男は、次第にD男に心を開いていき、C男の毎朝の日課は、ウサギの餌やりから、テラスでD男の登園を待つことへと変わりました。D男が登園することを心待ちにする様子を見て、また一つ、C男の幼稚園の中での居場所が増えたように感じました。少しずつ、園の中で自分らしく過ごすことができるようになったC男ですが、D男がお休みの時などは、寂しそうな、不安そうな様子が見られます。私たち保育者の元へとやって来ることがあります。C男が居心地がいいと感じられる居場所を、少しずつ増やしていきたい、そう思っています。

保育者が子どもにとって居場所となり、また、友達という居場所をたくさん見つけられるように援助していくことで、幼稚園全体が居心地のいい居場所となっていくのではないのでしょうか。